

同窓会

ニュース・レター

第3号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2004年3月20日発行



1964年理学部新築工事現場から発見されたわが国最古(約40万年前)のワニ化石。大阪大学総合学術博物館に原標本が保管され、骨格見本が展示されている。

大阪大学総合学術博物館は2004年4月に
共通教育棟イ号館一階に開設された。

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousou78@let.osaka-u.ac.jp

教え子たちへのメッセージ

◆行春や

哲学哲学史教授 里見 軍之

卒業生の皆さんは今人生の大きな舞台に立とうとしておられます。はるか長い道のりを希望と不安とで垣間みておられることでしょう。われわれの身の回りの人に物事を相談すると、下手をすると連帯責任が生じかねないので「慎重に」とか「それはなかなか難しい」とか答える例が多いのですが、アメリカ人に相談をもちかけると、自己責任が当然なので「チャレンジしてみよう」とか「トライしてみよう」とか答えることが多いそうです。どちらがいいのでしょうか。でもやはりポジティブ・シンキングの方がうまくいくような気がします。

小生も一種の卒業生ですが、ただし、舞台を降りつつ、帰らぬ人たちが熱い胸をよぎる、といったところです。学生院生時代から数えると四十年弱、教員生活だけでも三十年余、人生の大半を大阪大学で過ごさせていただいたこととなります。月並みですが、恩師、同僚、後輩など周りの人たちに恵まれ、何とか長らえてこられました。ある誌上で見かけた投句に「定年後 無神論者の 寺めぐり」というのがありましたが、まあ今後はこんなところでしょうか。芭蕉が深川の庵を發つ矢立の初めに、「行春や 鳥啼き魚の 目は泪」と詠みましたが、小生も「おくの横道」に旅立ちます。



大阪大学文学部助手、立命館大学講師を経て1975年から大阪大学文学部助教授、1988年教授。評議員を務める。編著書『現象学と方法の問題』『現代哲学の潮流』ほか。

◆アデュー

現代思想文化学教授 浅野 遼二

生まれる日があれば死ぬ日がある。入学や入社の日があれば卒業や退職の日がある。喜びがあれば悲しみもある。途中で挫折するときもあり、人生をやり直すこともある。

一九六〇年に入学して以来、数年を除けば、約四十年、大阪大学のキャンパスの中で学生として、また哲学教師として過ごしてきたのは幸運と言うべきであろう。大寒の日が、文字通り、母校の教壇での最終講義であり、親しい善意に満ちた顔に勇気づけられ、「生命に対する畏敬」の復活を願う「開かれた生命哲学」の講義ができた。立ち見もできるほどの満員の盛況の中で、高校や大学時代の友人、知人、学生、卒業生、昔の同僚、そして家族の見守る中で万雷の拍手に送られて講じ終えた。受講者の熱気で南側の窓には白い蒸気がたちこめ、外の景色が見えなかった。卒中の後遺症に悩む私を助けてくれた薩摩出身の若者と三歳の孫息子から花束ももらい涙腺がゆるんだ。黒板に寄りかかり気を取り直すと思わず、口から別れの言葉がでてきた。思い描いたことのない幸福の瞬間であった。

その夜から、今冬一番の大寒波が日本列島を襲った。寒波の緩むのを待つて不治の病で臥せっている横浜の兄を見舞った。「よく来たなあ」とかすれる言葉のあと、やせ衰えた兄の目からひと滴の涙がこぼれ落ちるのを見て拭いた。家内が持参した桜の小枝に「きれいだね」と言い、立春を過ぎた日に、妻子や姉妹に見守られ溺愛した孫娘の呼ぶ声に涙で応えて兄は息を引き取った。私にとって、この冬は忘れられない別離の季節になった。アデュー、愛する兄よ！懐かしの大学よ！



愛知学院大学助手、講師、1972年大阪大学医療技術短期大学部講師、同助教授、教授を経て1994年以降文学部教授。著書『バルン時代のヘーゲル』ほか。

◆時代の風

西洋史学教授 川北 稔

二十六歳で助手として赴任して以来、三十七年間にわたって阪大ないしその周辺で過ごしてきました。助手時代は、いわゆる紛争の頃でしたから、口号館前あたりは毎日騒然としていました。しかし、いまでは、歴史を勉強したいという学生の意識も、その頃とはまったく別なものになりました。特別のことをしてきたわけではありませんが、長くやってきただけ、歴史の生き証人として、ひとつだけ感じていることがあります。動かないようにみえても、世の中の構造というものは動くのだ、という当然のようなことなのですが。

「動かざるものの歴史」という言葉は、ずいぶん誤解もされてきましたが「見動かさないようにみえる構造も、いつかは崩れ、変形するという意味では、まさに正鵠を射ていると思います。われわれが拠つて立つ地盤が、じつはたえず動いているのだ、と考えることは不安なことでもありますが、その微妙な変化を「時代の風」として感じ取れるセンスを、歴史学が多少とも養えるとするれば、これほど愉快なことはありません。

人より無能な分だけ頑張つて、それなりに勉強はしてきたつもりですが、なかなか思うような仕事はできませんでした。とくに最後の七年弱は、管理運営のような肌にあわない役目を背負つて不本意でしたが、これもよい人生経験と考へたいと思つています。大学の組織として、「西洋史」という枠組みがどこまで有効かはよくわかりませんが、知的な意味でのその内実に当たるものは、二十一世紀人にとっても不可欠な意味をもっていると思います。みなさまのご健闘をお祈りします。



1967年文学部助手、1969年大阪女子大学講師、同大学助教授を経て、1976年大阪大学文学部助教授、1987年教授。評議員、研究科長、附属図書館長を歴任。著書『民衆の大英帝国』『近世イギリス社会とアメリカ移民』『砂糖の世界史』ほか。

退官なさる先生方から

◆大阪大学での二十年

日本文学教授 伊井 春樹



1968年愛媛大学助手、同大学講師、助教授、1973年国文学研究資料館を経て、1984年大阪大学文学部助教授、1995年教授。評議員を務める。著書『源氏物語注釈の展開と和歌資料』ほか。

私が大阪大学に赴任して二十年が経過し、今年の三月で定年を迎えることになった。もともとその前の年は、勤務していた国文学研究資料館と併任となり（これは業務の関係で、すぐには離れることができなかった事情による）、前期は二週間に一度東京と大阪を往復して二週間分の授業、後期は集中講義であったので、この大学とのかかわりは二十二年となる。長く研究所にいたため、東京での大学の授業は非常勤だけ、終わるとそそくさと帰り、学生や院生と話をする機会はほとんどなかった。これからはそうはいかなくなるのと、学生とどのように向き合うべきか、授業の内容はどうすればよいのか、などかなり緊張した思いをしながら新幹線で本を広げ、石橋からの坂道を歩いたものである。その折の教室の風景は、今でも鮮明に思い出すし、それは私の大阪大学の原点ともいえよう。

私が卒業論文や修士論文を読むようになって二十年、その間の記録は八十枚綴りの大学ノートにすべて書いており、それが十冊を越えた。一人に数ページ費やしたり、わずかページの方もあるため、単純に計算はできないが、数百人にはのぼる。それと、新入生は全員でできるだけ名前と住所を覚えることを努力した。今でも、ふと以前の卒業生の住所だけがよみがえってくることもある。この二つは私の大阪大学での貴重な財産である。東京でも海外に出かけてはいたが、大阪大学でもその機会はしばしば持つことができた。今年最後の年ながら、インドのデリー大学の大学院生の授業に二ヶ月派遣され、日本文学の国際化にこれからはますます尽力しなければと思った次第である。

◆雑感

英語学教授 河上 誓作



1967年大阪大学文学部助手、1968年九州大学助手、同講師、助教授を経て、1982年大阪大学助教授、1989年教授。評議員、研究科長を歴任。編著書『文の意味に関する基礎的研究』『ことばの仕組みを探る』ほか。

一九六七（昭和四十二年）四月一日、私は大阪大学文学部助手に採用された。この時採用された助手は九名。その中に里見軍之さん、川北稔さんもいた。四月分の給料袋には現金支給額二万八千九百四円とあった。ほんのこの間のこのように思うが、あれから三十六年が経ち、三月末にいよいよ定年退官である。一年後の一九六八年五月一日、私は九州大学教養部に配置換えとなる。その一カ月後、九大大型計算機センターに米軍ジェット機が墜落、これをきっかけに学園紛争が始まった。スト、デモ、占拠、封鎖解除。多くの大学人が経験した紛争を過激に体験した。その後、アイオワ大学留学（一ドル三百六十円の時代、ベトナム帰還兵を教える経験もした）、育児、学位論文、再度渡米してハーバード大学で研究。九大での十四年間は変化に富み、行動的かつ生産的な日々であった。

一九八二年の春、阪大に戻った。四月二日辞令交付の日、桜が満開で、余りの見事さに、気がついてみると医短の山道を歩いていた。散り始めた花びらが黄色のタンポポに降り注ぐ。その鮮明な映像は今も記憶に新しい。帰阪して二十二年、医短はなくなり、山道は閉鎖され、荒れ果てたままである。上山池は埋め立てられ、亀や鯉は土の中に消えた。文学部玄関前にあった旧木造校舎の名残の桜も、図書館改修工事のために、ある日無残に切り倒された。古き良き風景が消え、無機質なコンクリートの塊が増えていく。法人化を控え、今、大学の在り方が問われている。これからの阪大はどうあるべきか、大学人ひとりひとりの理念と行動力が試されている。

◆Docendo discimus

美学・文芸学教授 森谷 宇一



1971年岡山大学助手、1976年東北大学講師、同大学助教授を経て、1981年大阪大学文学部助教授、1988年教授。著書『美の変貌』『日本の芸術論』他。

わたしが阪大の教官としてすごしたのは二十三年間ですが、これについてはやりの言葉に従って自己評価をするとすれば、どんなに高く見積もっても、可もなし不可もなしというぐらいいしか言えません。これは研究と教育との両面にあてはまることですが、いまは教育の面にかぎって言えば、そんなわたしでもなんとか教師生活がつづけられたのはやはり学生諸君のおかげであつたと言わざるをえません。

このことに関連していささかはなむけめいた言葉をひねりだせば、学生にとって教師が必要である以上に教師にとつて学生が必要であるということであり、ひいては学生と教師との相互形成という作用です。実際、「親はなくとも子は育つ」と言われるのと同様あるいはそれ以上に、教師がなくとも学生は育つと言えるような気がしますし、なにしろ教師という商売は、学生がいなくともはなりたないものなのです（このことは独立行政法人化にもないます切実味を増してきました）。そしてまた、Docendo discimus（われわれは教えることによつて学ぶ）という古来の有名なことわざは、学生が教師によつて形成されて向上しないし脱皮するのにとらず、教師もまた学生によつて形成されて向上しないし脱皮するものだという事態を語っているように思います。そんなわけで最後に、この二十三年間、願わくは反面教師というほどではなかったとしてもあきらかに至らぬ教師であつたわたしにおつきあいたいだいた、けつして多くはないがまた少ないともいえない学生諸君に、心から感謝したいと思います。

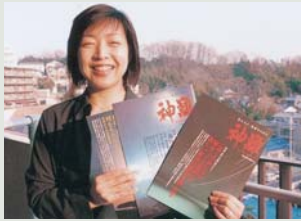
「老イル」日々。

車谷 奈穂子

人生で最初に「年齢（というか、老い）」を意識したのは、高校野球の選手が自分より年下になった時でした。その後、プロ野球の選手もお相撲さんも次々と年下になってゆき、今や三十年前の記憶を語れるようになった自分に、しばしば愕然とします。さしたる決意もないまま広告業界に入り、コピーライターとして働き始めて十五年。フリーランスになってからも三年あまりが過ぎました。次第に徹夜がつかなくなり、アルコールも抜けにくくなり、朝までに片付ける仕事があっても「先にちょっと睡眠」を執行するふてぶてしさも身につけて、やはり感じることは「年齢（というか、老い）」です。少なくとも大学時代には、未来の自分に、これほど体力的・精神的変化が訪れる（そして訪れ続ける）とは思いませんでした。

変われるのは「若さ」というやつの特権で、大人は鈍感で頑迷で……とすら、思っていたかもしれない。でも、違ふのだと、驚きをもって実感しています。ドラスティックな変化は常に起こり続けるのだ、と。

悲観的にならず、簡単に楽観視もしないこと。人の評価からきちんと距離をおくこと。肉体的なつらさや能力の限界を正しく認識すること——。変わっていく自身にひびけられるように、「こうありたい」と思うスタイルも変化しました。周囲にかけたきた迷惑や心配をかみしめつつ、また日しっかり老いよう、と、思いを新たにしています。



車谷奈穂子
1967年生まれ。1989年大阪大学文学部国語国文科卒業。広告制作会社勤務を経て、2000年よりフリーランスに。毎日のように原稿を書く仕事をしているのですが、普段は完全な黒子であるため、このように「実名・写真つき」で「自分のことを書く」なんて「シンジラナイ」思いです（笑）。

四十代。今が、私の青春です!?

豊高 明枝

学校の遠い先輩にあたる夫と結婚後、三十六歳で授かった長男は、重度の知的障害を伴う自閉症児。子どもの持つ生まれた障害という事実によって、私の人生は大きく変わってきました。自閉症とは、ヒトが外部からの様々な情報を自分の中に取り入れ処理する脳の機構がうまくはたらかない脳機能障害であると説明されます。そんな長男との生活は、最初は母の私も混乱するばかり。しかし、やがてすばらしい仲間や療育者と出会い、私自身の精神も明るい方向に花開いてきました。若い頃にあきらめた文章を書くことや翻訳への思いもやがて仕事に結びつき、四十を過ぎてはじめて自分の名刺を持つことになりました。ライターとしての仕事の他に、環境翻訳チームで取り組んだはじめての

本もPH P出版から出ています。『カサン ドラのジレンマ——地球の危機、希望の歌』 混迷した私たちの世界を見つめ新しい未来を築くひとつの手がかりに、ぜひ書店で手にとってお読みになってください。



豊高明枝（旧姓 桑本明枝）
1983年大阪大学文学部仏文学仏語学科卒業。登校拒否の弟と数年モナリウムの後、家を出て自立。幼児教育塾アシスタント、機械翻訳コーディネータ、秘書、編集補助、図書館司書、予備校採点講師等を経て、現在地域情報誌「アゴラ」ライター、翻訳家。五行歌同人。2003年秋引きこもりの弟と母の分離の経緯を月刊「むすぶ」に連載。

近況

高校教諭になって

音部 みはる

大阪市の高校で英語教諭になって早三年。学生時代には知らなかったことや予想外のこともありましたが、大学・大学院修士課程の六年間、大阪大学で学んだことを生かしてやって来られたように思います。

「授業」に関して最も役立っていることは、学生時代に「文法・語法」を大切にすると、この姿勢を学べたこと

理解したい・納得したい、という強い執意もあるのだという。私を私は常々感じています。このようになるときに、「正しい英語」を知り、不明な点を明らかにできたとき、彼らは英語のさらなる習得に意欲を燃やし、そして、英語が好きになるのだということも実感しました。ひとつひとつの語法を大切に、講義に臨んだり、論文を書いたりした経験が生きていて、ありがたく思っています。

高校に勤務するようになって、「授業」は数ある職務のうちの一部であるというところは予想以上でした。しかし、その他の職務にも精一杯取り組みながら、限られた時間の中で常に英語のことを考え、よりよい授業作りに集中できるのも、学生時代に、単なるフィーリングや生半

卒業生

で、言語の勉強や論文の書き方を入りに解説することの大切さを教えられたのはとても貴重な経験でした。

学校現場では、「コミュニケーション重視」の英語を取り入れ、基礎基本はないがしろにしているかのよう思われている方も多いかも知れませんが、実際はそうではないことに気がつくのに時間はかかりませんでした。「なぜそのような訳になるのか」「なぜ、違う表現法ではダメなのか。」「どうしてこの答えを選ばなくてはならないのか。」「生徒から、このような質問がわずか三年の間に、どれほどたくさんあったことでしょうか。確かに彼らの中には、適当に英語で「コミュニケーションができればいい」と考えている人もいます。しかしそれと同時に、

「可な知識によるごまかしではなく、「本当に理解すること」を教えて頂けたからだ」と、改めて感謝しています。これからも、経験を重ね、もっと勉強して行きたいと思っています。



音部みはる
1999年大阪大学文学部英文科卒業。
2001年同大学院文学研究科修士課程修了。
現在、大阪市の高校教諭。

文化の力で 大阪を元気に

音田 昌子

三十八年間勤めた新聞社を定年退職して、大阪府立文化情報センターの所長として第二の人生のスタートをきってもうすぐ二年になります。一日六時間、週五日の勤務は結構ハードですが、文化・生涯学習に関わる職場なので毎日が楽しく、仕事柄、能楽や文楽、オペラなどを鑑賞する機会も増え、忙しかった記者時代に比べ、はるかに文化的な生活になったと喜んでます。

文化の力で少しでも大阪を元気にしたい——そんな思いから、関西にゆかりの深い文化人をゲストに招いて、その生き様を語ってもらう対話型のトークサロン、地元NPOなどと連携して行う参加型の文化学習サロンなど、新しい企画も次々とスタートし、「OSKの夢よ再び」や、「関西の装丁家展」などは参加者の人気を集めました。府内の市町村や大学、研究機関との

ネットワークによる共催講座や連携事業も多く、年間約二十万人の利用者数を誇っています。ただ、生涯学習というと、定年後のお年寄りがすることというイメージが強いせいか、センターへ来るのは圧倒的に中高生が多いのが悩みの種。働き盛りの世代や学生たちにももっと関心を持ってもらえる事業展開が、これからの大きな課題です。

人が集まる場所に情報が集まる、情報が集まる場所に人が集まる——をモットーに、昨年四月から、月一回、「文情サロン」と称して、文化・生涯学習に関わる方たちを集めてもらい、缶ビール片手に、気軽に文化について語りあう交流の場も新しく設けました。ご興味のある方は、ぜひ、ご参



音田 昌子
1965年3月卒業。
同年読売新聞大阪本社に入社。
2003年9月より現職。

英文学の基礎体力

山田 雄三

今もあるのかどうかは分からないけれど、私が大学院に入った当時は院生会と呼ばれるものがあって、修士新一年生歓迎の講演会を主催していた。私ときの講演者は、当時京都におられた上野千鶴子さんだった。例の歯切れのいい口調で、「世の中で院のつく組織を思い浮かべてごらんさい。病院、僧院、それに大学院ぐらいでしょう」と述べておられたのが妙に印象的で、とんでもない所に来た気がした。

昼間でも薄暗い文学研究科の廊下を歩いてみると、まさしくそこは院生と呼ばれる世捨て人が隠棲しているように感じられた。しかし、ひとたび暗い廊下から院生研究室の扉を開くと、研究室ごとに異種多様な空間が広がっていたように思う。英文学研究室は「院」の名に反して運動サークルの部室さながらであった。故藤井

先生は解説者顔負けの野球通で、研究指導でも「月に向かって打て」が口癖だった。ゼミ対抗のソフトボール大会での河上先生の投球ぶりは有名で、そのよく曲がる変化球を真芯ヒットできた院生の数は少ない。無論、オクスフォード大辞典と首っ引きで英文を読むことが英文学の基本訓練だったが、玉井先生はそのまた基本を説いておられた。十三巻からなるこの辞典は二巻当り四kgほどで、棚から出し入れを繰り返すのに相当の握力を要する。まずは握力の鍛錬が肝要。辞書も電子化し、忘れられてしまったが、阪大の英文学の基本は利き手の握力なのである。



山田雄三
1990年大阪大学英文科卒業。
1992年同大学院文学研究科修士課程修了。
1998年文学博士。
現在、大阪大学言語文化部助教授。



◆ 日本史研究室のあゆみ

日本史研究室という名称は、文学部が哲学・史学・文学・美学・日本学の五学科を統合して人文学科とし、小講座制から大講座制に移行した一九五五年度以来のものである。このとき国史学講座と日本思想史講座は日本思想史講座となり、それまでの国史研究室という名称も、日本史研究室に改められたのである。



1982年秋 国史研究室教官と4年生



1998年10月 国史研究室旅行(能登巖門)

国史学講座は、法文学部が開設された二九四八(昭和二三)年に設置された講座で、藤直幹教授が担当した。五三年には梅溪昇助教授、翌年には時野谷勝教授が着任した。五六年には国史学第二講座が增设され、時野谷教授が担当した。第二講座は、六三年には黒田俊雄助教授が着任している。その後、国史学講座には六八年に脇田修助教授、八九年に平雅行助教授が、また日本思想史講座には七九年に都出比呂志助教授、八九年に芝原拓自教授が着任した。九四年には教養部解体に伴い、東野治之教授が文学部所属となった。なお、八八年には都出教授担当の考古学講座が新設され、考古学研究室が独立した。大講座制移行後は、九六年に村田路人助教授、九七年に村田修三教授、九八年に猪飼隆明教授、九九年に梅村喬教授が着任した。現在のスタッフは、猪飼・梅村・平・村田(路)の四教授と北泊謙太郎助手の計五名である。

九五年度の文学部改革と、九八〜九九年度の大学院大学化によって、日本史研究室も大きく変わった。九五より二年生から研究室に所属するようになったこと、大学院大学化により院生数が急増したことにより、二〇〇年で研究室構成員は倍増し、現在は

〇〇名を超すまでになっている。院生も、阪大以外の大学の出身者が増えた。研究室は過密状態であるが、二年生教育という点でも、院生たちが互いに切磋琢磨しあうという点でも、よい効果をもたらしていると思う。新しい時代に応じた研究室づくりが求められていることを痛感するところである。

(村田路人)

◆ ドイツ文学研究室 茫茫半世紀



平成14年 城崎への研究室旅行

文学部に独文学専攻が置かれたのは昭和二十四年、初代内山貞三郎教授と片山良展助手(昭和五十年教授)は、今居を定めて七輪で暖をとりながら冬を過ごされたと聞いた。翌年田中健二助教授が着任され、同窓会名簿を見ると昭和二十七年に二人、二十八年に五人、二十九年に三人の卒業生がある。結構な賑わいだっただようである。現在の文学部本館が竣工したのが昭和三十五年で、その年

田中先生が教授になられた。

私は昭和四十年独文進学だったが、田中教授がゲーテの詩とA・W・シュレーゲルの『文学論』、片山助教授がG・カイザー『カレーの市民』をテキストに使われた。ゲーテ詩講読では、先生の質問の意味がわからずに困惑し、あとの二つはテキスト自体が衝撃的に難解だった。両先生の授業は怖かった。今思えば、ほとんど何も理解していなかったが、勉強とはこういうものなのだ。納得しながら辞書を引き、いつのまにかテキストを読むとはどういうことなのかを教えられた。峻烈な言葉に隠された滋味を知るのには、ずっと後になつてのことだった。

昭和五十年に中村助教授が着任され、研究室の雰囲気はずいぶん開放的で陽気になり、師弟の距離は狭まった印象を受ける。しかし、授業では「文献学的入念さ」とことん拘られる先生のもとで、何よりもテキストの精緻な読み、深い味読こそ文学研究の基本とする学統がいつそう徹底された。時代の嗜好はいかに変わっても、この学統こそ阪大でドイツ文学研究に携わるものの原点であり、最後の拠り所であろう。一九七〇年の大学紛争のお



昭和30年頃、須磨への研究室旅行

りバリケード封鎖された校舎の前にテントを張ってハンガーストに入られた片山先生ほかの先生方の姿が今も脳裏に焼きついている。今に続く大学苦難の時代の始まりだったのだろう。

(林 正則)

◆ 美学・文芸学研究室の二〇年

美学研究室は一九七四年四月に、文芸学研究室は一九七五年四月に設置されたので、両研究室はともに開設からほぼ三〇年をへたことになる。設立当初の先生方(木村重信、當津武彦)につづき、中興をになわれた先生方(石田正、神林恒道)も退官され、二〇〇四年三月をもって、森谷宇一先生も退官される。四月からは大阪大学自体も独立行政法人となり、あたらしい時代をむかえることになる。そんななか、両研究室は、大橋良介、上倉庸敬、藤田治彦、加藤浩の四人の先生方を中心として、二〇世紀の人文文学の可能性を模索しているといえよう。

研究活動は、近年ますます活発になつてきている。一九九八年には美学研究室を事務局として「デザイン史フォーラム」が結成され、すでに三回の国際会議を開催し、その成果は二〇〇二年に『国際デザイン史』として結実した。おなじく一九九八年に、文芸学研究室を中心に「文芸学研究会」が発足し、美学研究室や他大学の研究者とも連携して、研究発表会をすでに二〇回ちかく開催したほか、機関誌『文芸学研究』を第八号まで刊行している。これとは別に、二〇〇〇年には美学研究室の編集による紀要『美学研究』も

創刊され、現在のところ第二号まで発行している。美学研究室ではさらに、二〇〇二年の夏から『大阪日日新聞』に「関西美術探訪」と題する連載を開始し、教官や院生が展覧会などの情報を寄せている。そのほか科学研究費補助金を受けた諸研究をはじめ、両研究室は、これまで以上に協力しながら、さかんな活動をおこなっている。

(伊達立晶・石黒義昭)



美学・文芸学 演習風景



事務局便り

◆「ユーズ・レター」創刊後、終身会費、寄付金をたくさんの方の会員の皆様よりいただいております。本当にありがとうございます。また「ユーズ・レター」に関する感想を下さった皆様にも感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

◆名簿について

二〇〇二年度版『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』の購入をご希望の方は事務局までご連絡ください。同窓会会員に限り版価(四千円)＋送料(二百九十円)でお送りいたします。終身会費(万円)をお支払いいただいた方には無料でお送りいたしますので、通信欄に名簿希望の旨、お書き添えください。二〇〇三年三月以降、終身会費または寄付金をお支払いいただいた方で、名簿を希望される方は、その旨事務局までお知らせください。数に限りがありますので、品切れの場合はご容赦ください。終身会費のお支払い、名簿の代金振込みは下記の郵便振替口座にお願いいたします。

口座番号 094011790043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

◆お願い

住所変更・勤務先変更などがありましたら、必ず同窓会事務局までご報告ください。その際、名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される方は、その旨お伝え頂ければ承ります。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

事務局への連絡はメールで、あるいはお手数ですが御葉書にてお願いいたします。

◆募集

◇「ユーズ・レター」の「卒業生の近況」への投稿を募集しております。写真一枚と、六百字程度の原稿を、事務局までお送りください。よろしくお願ひします。

◇同窓会の名称を募集しております。採用者には図書券二万円分を贈呈。
現在提案いただいている名称は以下のとおりです。

名称

- ・「待兼山・鰯の会」・「待兼山・わにの会」・「待兼わにの会」
- ・「待兼青山会」・「待兼山青山会」(漢詩の青山と、かつての青々とした丘陵と)
- ・「待兼文壇」・「浪速にワニ会」・「待兼会」・「文待会」

※「鰯」の漢字は読みにくいので賛成できない。

ご応募くださった皆様ありがとうございました。頂いた名称に関するご意見、また新たな名称などございましたら、同窓会事務局までお知らせください。以上皆様からのご応募、お待ちしております。

●事務局メンバー

- 事務局長：林正則(S四十二)
- 総務：服部典之(S五十六)
- 会計：和田章男(S五十五)
- 企画：立案・岸田知子(S四十五)、志水紀代子(S四十)
- 宮本孝二(S四十八)
- 広報：入江幸男(S五十二)、大西愛(S四十)
- アルバイト職員：武内正美(H十二)

同窓会に就職支援の輪を！

社会・経済の大きな構造変革を迫られながら、思い切った発想の転換もままならず、目前の不況を脱する方途も見出せずにいるというのが、現在の日本の状況でしょうか？そのしわ寄せが、文学部・文学研究科出身者の就職難という形で押し寄せています。

文学部・文学研究科の卒業生・修了生には、既成のものの方にとらわれない、大胆で柔軟な、想像力豊かな(これからの時代に最も求められている)人材が揃っています。社会の各分野で活躍なさっている同窓生の皆さま、大阪大学文学部・文学研究科で学んだ学生のために、就職支援の輪を広げることに力添え下さい！

文学部・文学研究科ではこの四月から教育支援室を立ち上げ、学生の視点に立った制度改革に着手します。その一環として、教育支援室の下に就職支援部門を設け、就職支援ネットワークの構築に積極的に取り組んでいくことになっています。

求人情報、就職活動へのアドバイスなど、就職に役立つどのような情報でも結構ですのでお寄せください。また、多彩な人材を擁する大阪大学文学部・文学研究科を各方面に積極的にアピールしていただきたくお願ひいたします。

(林 正則)

- 住所：大阪大学文学部・文学研究科同窓会…豊中市待兼山町二番五号 〒560-0853
- ホームページアドレス…<http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/>
- 事務局メールアドレス…dousou78@letosaka-u.ac.jp